第四章　明石の君の物語　明石の浦の別れの秋の物語

［第一段　七月二十日過ぎ、帰京の宣旨下る］

*年変はりぬ(年が変わりました)。　*注に＜源氏二十八歳。＞とある。

内裏に*御薬のことありて(うちにおんくすりのことありて、帝がご病気に御罹りに為って)、世の中さまざまにののしる(世間では退位について様々に噂が立てられました)。　*「薬の事」は＜薬を用いることから、病気の事＞(古語辞典)とある。

当代の御子は、右大臣の女(むすめ)、*承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、*二つになりたまへば(今年で二歳でしたので)、いといはけなし(次帝には幼すぎました)。　*「承香殿の女御(しょうきゃうでんのにょうご)」は賢木巻で、源氏24歳の諒闇の年に弘徽殿住まいの尚侍の君との密会に気付いた藤少将の同腹妹で、帝の第一妃たる人という補足説明のように紹介されていた。此処では更に「右大臣の女」と記されるが、大后ならびに尚侍の父君である桐壺帝御代の右大臣は昨年に「太政大臣亡せたまひぬ」と在ったので此処での右大臣は別人だが、同じ右大臣家勢の藤原氏には違いない。おそらくは大后の兄か乙人なのだろう。とすれば承香殿の女御は大后の姪に当たり、今上帝から見れば従兄妹である。右大臣が誰との明示はないが、およそ其の辺の血縁には違いない。それにしても、尚侍は故前右大臣の六姫である。六姫と源氏の出会いは源氏20歳の時でまだ父帝の時代だったが、藤少将に気付かれた密会当時は兄帝が即位二年目で、右大臣家勢力一色の後宮へ源氏は忍び込んでいたわけだ。忍び込むとはいえ気付かれていて、大后の敵意を大いに刺激し始めたことになって、遂には今に至るという経緯では在るが。　*今年で二歳という事は去年生まれたばかり。

春宮にこそは譲りきこえたまはめ(そこで今の皇太子に譲位為さるという事らしく、)。朝廷の御後見をし(おほやけのおんうしろみをし、其の補佐をして)、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに(政務を執り行うべき人を考えてみると)、この源氏のかく沈みたまふこと(今のように源氏が無位無官で地方に沈んだままでは)、いと惜しう(いとあたらしう、まことに勿体無く)あるまじきことなれば(不都合であったので)、つひに后の御諫めを背きて(遂に帝は大后の諫言を退けて)、赦されたまふべき(源氏御赦免の)定め出で来ぬ(評定が下りました)。

去年より(こぞより)、后も御もののけ悩みたまひ(大后も御加減が優れず)、さまざまのもののさとししきり(天の啓示かのような異変がいろいろ起きて)、騒がしきを(世間も不安で騒がしかったが)、いみじき御つつしみどもをしたまふしるしにや(大掛かりな御払い等を為さった御蔭だろうか)、よろしうおはしましける御目の悩みさへ(持ち直して居らした御目のご病気までもが)、このころ重くならせたまひて(最近は悪化なさって)、もの心細く思されければ(気弱にお成りでしたので)、七月二十余日のほどに(もう秋口となった七月二十日過ぎの日に)、また重ねて、京へ帰りたまふべき宣旨下る(源氏に京へ帰る様にとの宣旨が下りました)。

つひのことと思ひしかど(遂にこの時が来たかと源氏は御思いに成ったが)、世の常なきにつけても(移ろい易い世の中なので)、「いかになり果つべきにか(最後はどういう事に成るものやら)」と嘆きたまふを(と楽観も出来ず)、かうにはかなれば(このように急な事でもあり)、うれしきに

添へても(嬉しい反面)、また、この浦を今はと思ひ離れむことを思し嘆くに(この明石を此れ迄と見切って離れるのも残念だったが)、入道、さるべきことと思ひながら(入道も源氏の中央復帰は本望とはしながらも)、うち聞くより胸ふたがりておぼゆれど(急な別れに胸を詰まらせたが)、「思ひのごと栄えたまはばこそは(源氏が出来るだけ出世為さることこそが)、我が思ひの叶ふにはあらめ(自分の願いが叶う事に成るのだ)」など、思ひ直す(思い直しました)。

[第二段　明石の君の懐妊]

そのころは、夜離れなく(よがれなく、岡辺にも夜の通いが途絶える事無く)語らひたまふ(源氏は姫と毎夜睦み合いなさいます)。六月ばかりより(姫は六月くらいから)心苦しきけしきありて(悪阻などの懐妊の兆候が現れて)悩みけり(苦しみました)。かく別れたまふべきほどなれば(このように別れが近付く時なので)、あやにくなるにやありけむ(姫の身重が心配な廻り合わせとなって)、ありしよりもあはれに思して(源氏は姫が以前よりも愛しく思えて)、「*あやしうもの思ふべき身にもありけるかな(どうも親子の縁には悩まされる因果のようだ)」と思し乱る(と考え込みなさいます。)。　*「あやしうものおもふべき」は＜どうも普通じゃないように思える＞だが、姫の懐妊を知った矢先の別れという事態を受けての事だから、＜何が普通じゃないのか＞といえば源氏の自分を取り巻く出産や出自について、がである。自分自身が母親を幼くして亡くし、春宮には出生の秘密があり、左大臣家の実子も母親と死別した。そして今は、身重の女を明石に残して京へ帰ろうとしている。確かに「あやしう」。

女は、さらにも言はず思ひ沈みたり(当然にも落胆していました)。いとことわりなりや(無理もありません)。思ひの外に悲しき道に出で立ちたまひしかど(心外にも不遇の悲しい旅に出て御出での源氏は)、「つひには行きめぐり来なむ(いつかはこういう日が来るもの)」と、かつは思し慰めき(姫を納得させて宥めていました)。このたびはうれしき方の御出で立ちの(今度は晴れて嬉しい都への御帰還と御成りですが)、「またやは帰り見るべき(二度と此処には帰らないだろう)」と思すに(と源氏は御思いなので)、あはれなり(姫は可哀相でした)。

さぶらふ人びと(供人たちも)、ほどほどにつけてはよろこび思ふ(皆帰京を思い思いに喜びました)。京よりも御迎へに人びと参り(京からも迎えの者たちが来て)、心地よげなるを(皆復帰に浮かれていましたが)、主人の入道、涙にくれて(涙に暗れて暮らす内に)、月も立ちぬ(七月から八月に替わりました)。

ほどさへあはれなる空のけしきに(秋も深まる空模様の別れ間際に)、「なぞや(どうしてこうも)、心づから今も昔も(我ながら相変わらず)、漫ろなることにて身を放らかすらむ(すずろなることにてみをはふらかすらむ、出来心に身を任せてしまうのだろう)」と、さまざまに思し乱れたるを(迎えに来た二条院の従者たちの手前で源氏は今更ながら明石の姫の懐妊を何かと取り繕うと苦心なさったが)、心知れる人びとは(事情を知る付き人たちは)、「あな憎、例の御癖ぞ(何と往生際の悪い、いつものことだが)」と、見たてまつりむつかるめり(さすがに是には半ば呆れ気味でした)。

「月ごろは(この数ヶ月は)、つゆ人にけしき見せず(少しも其れらしい素振りを見せず)、時々はひ紛れなどしたまへるつれなさを(其の実は時々こっそり御通いに為っていたという白々しさ

なんだから)」
「このころ(こうなると)、あやにくに(却って)、なかなかの(どうしても)、人の心づくしにか(姫は引くに引けないだろうしな)」

と、つきじろふ(などと従者たちは陰口をたたき合っていました)。*少納言(せうなごん、従者たちから少納言と呼ばれている良清は)、しるべして聞こえ出でし初めのことなど(明石の姫を我が物顔で言い触らしていた昔の事を)、ささめきあへるを(其の従者たちが話題にしているのを耳にして)、ただならず思へり(さすがに面白くありませんでした)。　*「少納言」という呼び方は、明石入道が須磨の浦へ源氏を迎えに来た時にも、入道の使者が源氏への取次ぎに良清を呼び出す時に使われていた。他に言い換えは出来ない絶妙の呼称なのだろうが、もとより公職の少納言である筈は無く、源氏付きの側用人に対して、小番頭さん、くらいの気持ちかと思う。大番頭は惟光だろうか。尤も、番頭も今や余り聞かない呼称だが。

[第三段　離別間近の日]

明後日(あさて)ばかりになりて(ほどに出発の日を控えて)、例のやうにいたくも更かさで渡りたまへり(いつもほど遅くはない夜分に源氏は岡辺に御渡りになりました)。さやかにもまだ見たまはぬ容貌など(明るい時にはっきりとはまだ御覧になっていなかった姫の容姿などが)、「いとよしよししう(実に血筋を思わせる)、気高きさまして(気品の高さで)、めざましうもありけるかな(目を見張るほどだ)」と、見捨てがたく口惜しう思さる(当地に残すのが惜しく御思いに為りました)。「さるべきさまにして迎へむ(然るべき用意をして京に迎えよう)」と思しなりぬ(と御思いに為ったので御座います)。さやうにぞ語らひ慰めたまふ(姫にも然様に御話しなさって慰めなさいました)。

男の御容貌、ありさまはた、さらにも言はず(姫もまた源氏の姿を自分の男として改めて拝せば、今さらに言うまでも無い素晴らしさでした)。年ごろの御行なひにいたく面痩せたまへるしも(ここ数年の念仏行でだいぶ御顔がお痩せに成っていたが)、言ふ方なくめでたき御ありさまにて(例えようも無い美しさで)、心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつつ(別れを辛そうに為さる御姿で涙ぐんで)、あはれ深く契りたまへるは(心を込めてお約束下されたので)、「ただかばかりを、幸ひにても(もう是だけで十分幸せと思って)、などか止まざらむ(どうして諦められないものか)」とまでぞ見ゆめれど(とまで姫は思いもしただろうが)、めでたきにしも(その御立派さに)、我が身のほどを思ふも(身の程を思い知っても)、尽きせず(身重だけに諦め切れません)。

波の声、秋の風には、なほ響きことなり(実に情緒深く響いて、)。塩焼く煙かすかにたなびきて、とりあつめたる所のさまなり(寂しさいっぱいの明石の夜でした)。

「このたびは立ち別るとも、藻塩焼く煙は同じ方になびかむ」(和歌 13-16)

「今このたびは別れても、やがて思いは実を結ぶ」(意訳 13-16)

とのたまへば(と源氏が御詠みになると)、

「かきつめて海人のたく藻の思ひにも、今はかひなき恨みだにせじ」(和歌 13-17)

「消すに消せない悲しみも、今は堪えて見送ります」（意訳 13-17）

*注に＜明石の君の返歌。源氏の「焼く」「煙」を受けて「火」と返す。「ものおもひ」に「物思ひ」と「藻」「火」、「かひなき」に「効」と「貝」、「うらみ」に「恨み」と「浦」を響かせる。恨みさえもしませんの意。＞とある。源氏が＜二人の思い＞さらには＜生まれてくる子の養育＞を「藻塩焼く煙」に例えたので、姫も返歌を海尽くしで詠んだのだろう。正意は「掻き集めて海人の焚く物思ひにも今は甲斐なき恨みだにせじ」で＜思い起こせば海辺の女には消せない悲しみばかりですが今は堪えて恨み言は言いません＞ということだろう。洒落言葉の方は「掻き集めて海人の手繰藻のおも火にも今は貝なき浦見だにせじ」で＜水を掻いて採取した藻塩を煮詰めて製塩している時は海人は貝漁の為などに海へ出たりはしない＞ということらしい。是は言葉遊びで歌作りの巧みさと客観性のある教養と歌の軽さの演出を表現しているのだろう。情景詠みでは無いが完成度は高そうで、源氏の贈歌および前振りが弥に取って付けた様に藻塩を持ち出したと思ったら、この歌の枕だった。

あはれにうち泣きて（姫ははらはらと涙ぐんで）、言少ななるものから（言葉少ななながらも）、さるべき節の御応へなど浅からず聞こゆ（別れに臨んでのこの返歌などは精一杯心を尽くして御答え申し上げたのです）。

この、常に（このところずっと）ゆかしがりたまふ物の音など（源氏が聞きたがって居らした琴の演奏を）、さらに聞かせたてまつらざりつるを（姫が一度もお聞かせ申して来なかった事を）、いみじう恨みたまふ（この際源氏はどうしても御聞きに為りたがりました）。

「さらば（それでは）、形見にも偲ぶばかりの一琴をだに（せめて思い出のよすがにでも一曲演奏しましょう）」とのたまひて（と源氏は仰って）、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして（京からお持ちに為っていた七弦を海辺の舘に取りに遣わして）、心ことなる調べをほのかにかき鳴らしたまへる（特にしっとりした曲を静かにお弾きに為りました）、深き夜の澄めるは（深夜の澄んだ空気に）、たとへむ方なし（染み入る音でした）。

入道、え（入道は源氏の琴の音にとても）堪へで（たへで、涙を隠しきれずに）箏の琴取りてさし入れたり（娘に伴奏させようと十三弦を取り出して寝屋の中に差し入れました）。みづからも（姫自身も）、いとど涙さへそそのかされて（ひどく涙を誘われて）、とどむべき方なきに（悲しみを抑え切れずに）、誘はるるなるべし（源氏に伴奏しました）、忍びやかに調べたるほど（低い音の弾き方は）、いと上衆めきたり（とても上品でした）。

「入道の宮の御琴の音を（出家した中宮のお弾きに為る琴の音を）、ただ今のまたなきものに思ひきこえたるは（現在の最上のものと思い申すのは）、今めかしう（今風で）、あなめでたと（素晴らしいと）、聞く人の心ゆきて（その琴の音を聞いた者の心に響いて）、容貌さへ思ひやらるる（宮の容姿さえ思い浮かぶ）ことは（からなので）、げに、いと限りなき御琴の音なり（なるほど、それは実に素晴らしい御琴の音に違いない）。これはあくまで弾き澄まし（それに比べてこの姫の琴の音は非常に澄んで）、心にくくねたき音ぞまされる（羨ましいほど優れた腕前だ）」

この御心にだに（このように御考えの源氏の素養を以ってしても）、初めてあはれになつかしう（姫の琴は初めてしみじみ感じ入る）、まだ耳なれたまはぬ手など（いまだ知らずに居た弾き方などが）、心やましきほどに弾きさしつつ（分かり掛けた所で曲が終わってしまって）、飽かず思さ

るるにも(源氏はもっと聞きたいと御思い為さるにつけても)、「月ごろ(この数ヶ月)、など強ひても(なぜ無理を言ってでも弾かせること無く)、聞きならさざりつらむ(聞かずに来てしまったのだろう)」と、悔しう思さる(後悔なさいます)。

心の限り行く先の契りをのみしたまふ(源氏は姫に心を尽くして将来のお約束だけは固く為さいます)。「琴は、また掻き合はするまでの形見に(この七弦は再会して再び伴奏する標として、預けて置きます)」とのたまふ(と仰います)。女、

「なほざりに頼め置くめるひとことを、尽きせぬ音にやかけて偲ばむ」(和歌 13-18)

「せめて形見の七弦が、一言よりは頼もしい」(意訳 13-18)

言ふともなき口すさびを(言うとも無く口ずさむのを)、恨みたまひて(源氏はむしろ姫の心変わりを心配為さって)、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒の、調べはことに変はらざらなむ　(和歌 13-19)

「片身に託す七弦は、指きり拳万針千本　(意訳 13-19)

*注に＜源氏の返歌。「かたみ」に「形見」と「片身(互いに)」。「なかのを」に「中の緒(琴の糸)」と「仲の緒(二人の繋がり)」。「ことに」に「異に」と「琴に」を掛ける。「なむ」終助詞、願望。互いに心変わりせずにいたいものだの意。＞とある。ということは「逢ふまでのかたみに契る中の緒の調べはことに変はらざらなむ」を丸ごと重ね読みすれば、＜また逢う日までの形見にした琴の糸の調子を変えずに置くように片身同士お互いに約束した心は変えない事にしましょう＞という事になる。

この音違はぬさきにかならずあひ見む(この調べが変わる前に必ず再会したいものだ)」と頼めたまふめり(と念押しなさったようでした)。されど(それでも)、ただ別れむほどのわりなさを思ひ咽せたるも(女はただ別れの辛さに咽び泣いていたのですが)、いとことわりなり(それはもう無理の無いことでした)。

[第四段　離別の朝]

立ちたまふ暁は(源氏は京への帰途の日は)、夜深く出でたまひて(まだ未明の暗い内に出発なさって)、御迎への人びとも騒がしければ(迎えの者が多く居たので来た時よりも騒がしく)、心も空なれど(浮き足立っても居ましたが)、人まをはからひて(隙を見計らいなさって姫に歌を詠まれます。)、

「うち捨てて立つも悲しき浦波の、余波(なごり)いかにと思ひやるかな」(和歌 13-20)

「見返せば寄せる浦波に、名残惜しさに後を引かれる」(意訳 13-20)

御返り、

「年経つる苫屋も荒れて憂き波の、返る方にや身を類(たぐ)へまし」(和歌 13-21)

「洗い浚いの引き潮に、この身諸共呑まれたい」(意訳 13-21)

と、うち思ひけるままなるを見たまふに(悲しみを隠さず在りのままに詠んだ姫の返歌を御覧になって)、忍びたまへど、ほろほろとこぼれぬ(源氏は我慢して居らしたが、ついほろほろと涙を御零しなさいます)。

心知らぬ人びとは(姫の懐妊を知らない供人たちは)、「なほかかる御住まひなれど(やはりこのような侘び住まいでも)、年ごろといふばかり馴れたまへるを(一年ほど馴れて御出でなので)、今はと思すは(いよいよの別れともなると)、さもあることぞかし(思い出も在るのだろう)」など見たてまつる(などと拝し申します)。良清などは、「おろかならず思すなめりかし(殿は明石の姫がかなりお気に入りのようだ)」と、憎くぞ思ふ(忌々しく思いました)。うれしきにも(そして帰京を嬉しがりながらも)、「げに、今日を限りに、この渚を別るること」などあはれがりて(などと感傷に浸って)、口々しほたれ言ひあへることどもあめり(思い出話や湿っぽい挨拶などを口々に言い合っても居たようです)。されど、何かはとてなむ(特別な事は在りませんでした)。

入道、今日の御設け(おんまうけ、御祝いの品々を)、いといかめしう仕うまつれり(非常に盛大に振舞いました)。人びと(付き人から)、下の品まで(下男に至るまで)、旅の装束めづらしきさまなり(揃えてあった旅行服は立派でした)。いつの間にか(一体いつの間に)しあへけむと見えたり(用意したかと思える程でした)。

御よそひは言ふべくもあらず(殿の御服については言うまでも無く、)。御衣櫃(みぞびつ、衣裳箱を)あまたかけさぶらはす(幾棹も背負わせて御供させます)。まことの(其等とは別に)都の苞(つと、土産物)にしつべき御贈り物ども、ゆゑづきて(趣向が凝らして在って)、思ひ寄らぬ隈なし(至れり尽くせりでした)。今日たてまつるべき狩の御装束に(今日お召しになる予定の狩装束に姫の歌が)、

「寄る波に立ちかさねたる旅衣、しほどけしとや人の厭はむ」(和歌 13-22)

「涙で仕立てた此の服を、塩まみれなんて言わないで」(意訳 13-22)

*注に＜明石の君の贈歌。「たち」は「裁ち」と「立ち」の掛詞。「波」「立つ」「塩どけし」は縁語。「寄る波に」から「旅衣」まで下句に係る序詞。「人」は源氏をさす。＞とある。なので、「寄る波に立ちかさねたる旅衣(何度も込み上げる涙で泣きながら仕立てたこの旅服を)しほどけしとや人の厭はむ(涙が滲んで塩塗れだからと言って貴方は嫌がるでしょうか)」、となる。

とあるを御覧じつけて(と添えられているのを御目に留めなさって)、騒がしけれど(出発間際の慌しさではあったが)、

「かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの、日数隔てむ中の衣を」(和歌 13-23)

「逢える日までの約束に、今の服を置いて行きましょう」（意訳 13-23）

とて（と返歌を詠んで）、「心ざしあるを（折角の心ざしだから）」とて、たてまつり替ふ（源氏は着替えなさいます）。御身になれたるどもを遣はす（そしてそれまで御身に着ていた馴れた服共々に姫に届けさせなさいます）。げに（是は実に）、今一重（いまひとへ、琴の他にもう一つ）偲ばれたまふべきことを添ふる（自分を思い出して貰い為さるよすがと成るべき事を加える）形見なめり（記念の形見と成るでしょう）。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを（飛び切り上等な服に香の焚き込められているものが）、いかが人の心にも染めざらむ（どうして人の胸に染まない事がありましょうや）。

入道、「今はと世を離れはべりにし身なれども（迷いは無いと出家致した身の上ですが）、今日の御送りに仕うまつらぬこと（今日のお見送りに付き従い申しませぬ事は残念です）」など申して、かひをつくるも（口を貝の形のようにへの字に曲げて泣き顔になるのも）いとほしながら（別れを惜しんでの事ながら）、若き人は笑ひぬべし（若い従者たちの目には尊大な男のだらしなさが可笑しかった事でしょう）。

「世を憂みにここら潮染む身となりて、なほこの岸をえこそ離れね　（和歌 13-24）

「じっと我慢をし続けて、更に我慢をし続ける　（意訳 13-24）

*注に＜入道の贈歌。「うみ」に「海」と「憂み」。「この岸」の「こ」に「子」と「此」を掛け、「此岸」を「彼岸」の対で用いる。「潮染む（しほじむ、海辺の暮らしに慣れる）」は「海」の縁語。娘のことが案じられてならない。＞とある。そうなのかもしれないが、「このきし」については「子」と「此」の掛詞というのは、素直には腑に落ちない。むしろ「この際」と「この岸」の掛詞になっていると考えて、「なほこのきしを」を＜更に此の期に及んでも＞と読めば、「えこそ離れね（とても去る事は出来ない）」に素直に繋がる。なお、「ここら」は今でも稀に使うが＜この所ずっと＞という事だろう。通せば此の歌は「世を憂みに（中央での不遇を憂いて）ここら潮染む身となりて（この数年来の海辺暮らしに馴染んだが）なほこの岸をえこそ離れね（殿を京へ御見送りするこの段になっても私は此処を去る事は出来ない）」という現状の不安定さを憂いたもので、長年の田舎暮らしに堪えた辛い思いを滲ませているので、単に＜懐妊した娘の安産＞への不安だけでなく、＜母子共々将来の身分保障＞への不安も訴えているのだろう。

*心の闇は、いとど惑ひぬべくはべれば（子を思う親心は盲目でますます混乱してしまいそうですので）、境までだに（国境までの御見送りとさせて頂きます）」と聞こえて（と入道は源氏に申し上げて）、「好き好きしきさまなれど（色恋に親が口を出すようですが）、思し出でさせたまふ折はべらば（娘を御思い出し下さることがありましたら、御文を賜りとう存じます）」など、御けしき賜はる（などと其の気の確認を取らせて戴きました）。　*「心の闇」という言い方については、既に幾度も引用された「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」（後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔）という古歌に拠る、と注にある。

いみじうものをあはれと思して（源氏も別れをたいそう悲しまれて）、所々うち赤みたまへる御まみのわたりなど（赤く腫らしなさった目元などが）、言はむかたなく見えたまふ（言い様も無く切なそうでした）。「思ひ捨てがたき筋もあめれば（帰京はしますが気に掛かる懐妊の件もあるので）、今いととく見直したまひてむ（直ぐにでも姫に納得して頂けるよう処遇する心算です）。た

だこの住みかこそ見捨てがたけれ(それにしても今はこの住まい自体が名残惜しい)。いかがすべき(どうしたものか)」とて、

「都出でし春の嘆きに劣らめや、年経る浦を別れぬる秋」(和歌 13-25)

「都の春に劣らない、別れが惜しい浦の秋」(意訳 13-25)

*注に＜源氏の返歌。一昨年の春三月二十日余りに離京した。その時の別離の悲しみに変わらないという。＞とある。他の含みは無いのだろうか。私には見つからない。だとしたら拍子抜けするほど平坦で、挨拶の愛想返し程度にしか思えない、捉え所の無い歌だ。

とて(と詠んで源氏が)、おし拭ひたまへるに(涙を押し拭って御出でになると)、いとどものおぼえず(入道はますます感傷に耽って)、しほたれまさる(落胆しました)。立ちゐもあさましうよろぼふ(立っているのも儘ならず転びそうになりました)。

[第五段　残された明石の君の嘆き]

*正身の心地(取り残された姫の気持ちは)、たとふべき方なくて(例えようも無く悲しく)、かうしも人に見えじと思ひ沈むれど(そうとは見せまいと気を鎮めていたが)、身の憂きをもとにて(身分違いとは思いながら)、わりなきことなれど(無理も無いが)、うち捨てたまへる恨みのやる方なきに(捨てて行き為さった源氏への恨みの遣る方なさに)、たけきこととは(出来る事といえば高々)、ただ涙に沈めり(ただ涙に暮れることでした)。　*「正身(さうじみ)」は＜本人＞という言い方、との事。他にこの人物を特定する職名や地位が無いか、分かりずらい場合に用いられるのだろう。此処でも父親の明石入道という強烈な個性を持つ登場人物が居るので、姫を明示する為に使われている、のではあるだろうが、他に女(むすめ)なり、姫なりの呼び方も有りそうに思う。そこで「正身」には何か他の意図もあるかと考えて、この明石巻と末摘花巻を通して、此れまでは＜生娘の本人＞というように解釈してきた。それで今までは辻褄が合っていたが、此処に至って其の断言は無理となった。明石の姫は身重で、生娘の筈が無い。此処で敢えてこの言葉を使う作者の意図を考えると、＜ポツンと取り残された本人＞という姿が浮かぶ。妙齢の女が＜生娘で居る事＞は世間からも自分の人生からも＜ポツンと取り残され＞て居る事に成るのだろうか。だとすれば「正身」は本質的に＜取り残された存在＞が意図されている言葉かもしれない。そう成る様な気もするが、＜生娘＞という物性の生理状態に比べて＜取り残された＞という経過状態は漠然とした概念で、作者が「正身」という言葉を使う意図は此処に来て大分ボヤケた。感性上の印象だが、「正身」はやはり気になる言葉だ。今後も注意深く読んで行きたい。

母君も慰めわびては、「何に、かく(どうしてこんなに)心尽くしなることを思ひそめけむ(気苦労になる縁談を考え出してしまったのだろう)。すべて、ひがひがしき人に(中央志向に凝り固まった偏屈な夫に)従ひける心のおこたりぞ(従ってしまった私の過ちに他ならない)」と言ふ。

「あなかまや(やかましい)。思し捨つまじきことも(お見捨てになれないであろう姫の身重の事も)ものしたまふめれば(殿はお考えのようなので)、さりとも(何らかの処遇を)、思すところあらむ(して下さる事だろう)。思ひ慰めて(気を落ち着けて)、御湯などをだに参れ(薬湯でも飲みなさい)。あな、ゆゆしや(ああ辛気臭い)」とて(と入道は言って)、片隅に寄りゐたり(部屋の隅で縮み込んで居ました)。

乳母、母君など、ひがめる心を言ひ合はせつつ(入道の意固地を責め合って)、「いつしか、いかで(いつかは如何にかして)思ふさまにて(理想通りの)見たてまつらむと(結婚をして頂きたいと)、年月を頼み過ぐし(長い年月願って来て)、今や、思ひ叶ふとこそ頼みきこえつれ(今こそその願いが叶うと期待申し上げておりましたが)、心苦しきことをも(このような悲しい離別を)、もののはじめに見るかな(これからという時に迎えるとは)」と嘆くを見るにも、

いとほしければ(入道は非常に心許無くて)、いとどほけられて(ますます惚けて来て)、昼は日一日(ひひとひ)、寝(い)をのみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて(夜にむっくりと起きて座しては)、「数珠の行方も知らずなりにけり(数珠を何処かに忘れてしまった)」とて、手をおしすりて仰ぎゐたり(素手を擦り合せて呆然と天を見ていました)。

弟子どもにあはめられて(弟子たちに呆れられながら)、月夜に出でて(それでも月夜の庭先に出て)行道(ぎゃうだう、歩き読経)するものは(したところが)、遣水(やりみず、庭の水回し)に倒れ入りにけり。よしある岩の片側に腰もつきそこなひて(さらに趣向を凝らした石の端に腰を着き損ねて)、病み臥したるほどになむ(寝込んでしまうという始末でした)、すこしもの紛れける(しかし、それでやっと少し憂鬱が紛れたのでした)。